

想うがままに

革命家として清田祐一郎を葬送する

本誌編集委員

小寺山康雄

四月一日、奇しくもぼくの66回目の誕生日、開花の遅れた桜がようやく散り始めた頃、清田祐一郎が66歳で逝った。葬儀は清田が晩年の53年を過ごした芦屋市で執り行われ、昔年の同志、新開純也が葬儀委員長を務めた。参会者の8割は清田の学習塾の生徒、卒業生、その親たちで、残りの2割は、ぼくのように清田とともに学生運動を闘い、その後、労働運動、社会運動を担ってきた人たちだった。

「無宗教自由葬」にふさわしく、簡素な美しさに包まれ、周囲の壁には全港湾に招かれて講演している死の直前の

清田の写真が数葉飾ってあった。

三府県学連統一行動を実現

清田は学生時代(京都大学)、一九五八年に共産党を離脱し結成された共産主義者同盟(フンド)の幹部として、京都府学生自治会連合(京都府学連)の委員長として、60年安保とそれ以降の学生運動ではなばなく活動した。六二年の大学管理法(大管法)反対闘争で機動隊の阻止線を突破すべく円山公園でアジった名演説は、葬儀で何人もの人が言及したように、当時を知る人の間ではいまだに語り種となっている

ほどである。けだし、清田祐一郎は伝説の人であった。

ぼくが清田と初めて出会ったのは大管法闘争の真只中である。60年安保闘争後、学生運動は沈滞し、全国学生自治会連合(全学連)も機能停止していたばかりか、主導権をめぐる不毛の対立を繰り返し、全学連とその傘下の自治会は四分五裂していた。そうした中で京都、大阪、兵庫の関西三府県学連は自治会機能も健在で、デモ参加者数には60年安保闘争時と比べてもさして落ち込んでいなかった。

当時、ぼくらは前年に共産党を離脱

し、統一社会主義同盟(統社同)。学生組織はフロント)を結成していたが、ぼくは統社同の全国委員、学生部長、兵庫県学連の委員長であった。その頃、清田から「相談したいことがある」と呼び出しを受けたのである。

市民派議員のパイオニアとして、今も堺市で頑張っている長谷川俊英(当時、立命館大学学友会執行委員長)とともに、ぼくは清田が指定した同志社大学構内の彼らのアジトに出かけていった。アジトに入ると、ぼくと長谷川の周囲を、当時の学生運動用語で「暴力装置」と称していた体育会系の屈強な男数人が取り囲み、いきなりボス交(ボス同士の交渉)に入ろうとするではないか(まず相手を威嚇したうえで、ボス交と称する折衝をやるのが、ブンド特有の手法だった)。これには長谷川が怒って「こいつら(暴力装置)を部屋から出せ。出さなんだからワシらは帰るぞ」と、一喝した。「暴力装置」ど

もは色をなしたが、清田は「わかった。出ていかすから話しあいを続けよう」と、折れたのは当然といえは当然の礼儀だが、清田はブンドの中では話の通じる男であることをこのとき知った。

清田は「運動の停滞を打破するため、大管法反対の関西三府県学連統一行動をやりたい。成功すれば全国の学生運動再建の突破口になる。京都でやるのはどうか」と、言う。ぼくは「賛成だが、京都はダメだ。神戸ならやれる。それとデモ指揮はオレがやる。京都府学連はそれに従ってほしい。跳ね上がった行動はやらない。それを約束しなければこの話はご破算だ」と言った。清田は黙ってうなずいた。こうして史上初めて関西三府県学連が同じ場所に集まって統一デモンストレーションをやるという快挙が実現するのである。

信義に篤いやつだった

とは言っても、清田らとぼくらはそ

れまでまったく接触がなかった上に、ここでは詳しくふれることはできないが、ブンドと統社同の間には革命路線においても、学生運動のすすめ方においても共通するものはほとんどなかった。

ブンドは巷間流布しているようなトロツキズム原理主義ではない。ブンドは共産党の綱領に代わる革命理論を構築するために、宇野弘蔵の経済理論、廣松渉のマルクス主義哲学、吉本隆明の国家Ⅱ共同幻想論など、当時の非共産党の最先端理論を手当たり次第取り込もうとしていた。ブンドにとって、トロツキズムはそのうちのひとつにすぎなかった。ブンドの中で理論家として知られていた新聞などは真偽のほどは定かでないが、グラムシまで研究していたと、聞いたことがある。

ブンドはよくいえば思考は柔軟だが、その柔軟性はしばしば無原則主義に転ずる。そして党派的利害より大衆運動を優位におく。いい意味で、わが

構革派とよく似た体質だったといえるだろう。それでもブンドとぼくらの間には越え難い溝があった。

それでもぼくは神戸で三府県学連の統一行動をやることを清田に約束した。それまでも大管法闘争は60年安保闘争以来の盛り上がりをもせていたが、これを機に一挙に高揚した。県学連未加盟校の神戸商船大学(当時)や神戸女学院など、これまで県学連のデモにほとんど参加したことのない大学が次々にストライキを打ち、デモ参加を表明しはじめた。

統一行動は大成功だった。三府県学連あわせて一万人近い学生が神戸市役所前広場を埋め尽くし、道路にあふれ、神戸一の繁華街三宮一帯の交通は完全にマヒしてしまっただが、機動隊はなす術なく立ち尽くすだけであった。

商船大学の学生はお揃いの紺の海軍服を着て威風堂々とデモ行進した。神戸女学院の女子学生はハイヒールのま

ま参加し、途中で靴を脱いでしまった。どの学生の顔も解放感にあふれ、シユプレヒコール、市民へのビラ手渡しを嬉々としてやった。市民もまた、デモに拍手シカンパまでしてくれる人もいた。

ぼくのデモ指揮はブンドが「お焼香デモ」と嫌悪していた穏健デモに徹した。デモの経験が少ない商船大学や女学院の学生を大切にしていたのだ。横に並んでいた清田は、ブンドの活動家に「いつまでちんたらしたデモをやらせるのだ」と突き上げられたが、ぼくとの約束を守ってくれた。

三府県学連統一行動は翌年、核搭載艦ポラリスの日本寄港抗議闘争でも実現した。統一行動の前日、神戸にあったアメリカ領事館前に座り込んでいたぼくらのところに清田のあとの府学連委員長であった故高瀬が数人の学生とともにやってきた。突入できるところはないかと調査しに来たというのだ。ぼくは県学連委員長を退いていたが、

当日はデモ指揮をやるよう後輩に頼まれていたので、ややこしいことになるなあと案じていた。

ところが、当日になって高瀬は来なかった。清田は「あいつが来たら面倒なことになる。東京に行かした」と、打ち明けた。領事館に突入することよりも、ぼくらとの共闘関係を大事にしてくれたのだ。

それ以来、ぼくは清田をすっかり信頼してしまった。芦屋で電器屋をやっていた彼の弟(九年前に突然死した)から引越したばかりの家の電器製品を全部買ったのもそのためだ。

「先生」よりも「おっちゃん」

清田と久しぶりに会ったのは一九九九年の芦屋市長選の候補者擁立の話のためである。

清田とのつきあいは学生時代のあとも断片的にあったが、清田が芦屋に来たからも、突っ込んだ話をする機会は

なかった。卒業後尼崎で、それまで一面識もない一世代上の労働運動活動家と「阪神共産主義者協議会」を組織し、労働運動とのつながりをつくろうとしていたことは知っていたが、直接の交流はなかった。

北村春江市長に対抗する候補者探しに難航していたばかりは、清田から「いい候補者がいる」と聞いて、一も二もなくとびついた。「いい候補者」とは娘が清田の塾生である映画監督の大森一樹であった。しかし、大森からは「まだ映画の仕事を辞める気はない」ということで、あつさり断られた。

話し合いをしたのは清田の塾兼住居のアパートだったが、遅くまで塾生同士が隣の部屋で駄弁ったり、ぼくらの酒肴を用意してくれたり、まるで家族のような雰囲気だった。

清田は震災のとき、被害の小さかった塾生とともに、高齢者やハンディキヤップのある人の家を回って、いろいろ

ろ手助けしたという。葬儀で塾生や卒業生は、一様に「おっちゃん勉強を教えるのもうまかったけど、おっちゃんから学んだ一番のことは人間の生き方です」と、健気なお別れの言葉を述べた。彼ら彼女らにとって、清田は「先生」よりも「おっちゃん」と呼ぶにふさわしい存在だったのだろう。臨終のとき、この子らは病室から溢れるほど集まり、手足をさすり、「おっちゃん死んだらあかん」と、大声で泣き叫んでいたという。

蓋う赤旗はないけれど

元赤軍派議長長の塩見孝也は「清田さんはすぐれた指導者なのに、ついに全国的な場で活動しなかったのが残念だった」と追悼した。ブンドに限らず左翼は、あるいは右翼でもそうだが、政治運動の中心は東京であり、東京で活動してなんぼと考える風潮はいまだに残っている。「一点突破全面展開」のた

めには、東京に一極集中するべきだというのであろう。ついでにいうと、明石家さんまや島田紳助まで東京中心に活動しているのはけしからん。

塩見の目には、尼崎や芦屋で地域活動を政治的というよりも、社会的に鍛えようとした地味な清田の活動は政治的には隠遁しているとしか映らなかつたのだろう。相変わらず単細胞の男だ。

政治権力の頭部を急襲し、あるいは議会で多数派になり、獲得した政治権力をテコに社会を上から革命し、あるいは改良することよりも、市民社会の深部から変革していく長期にわたるヘゲモニー闘争を継続するという、より困難だが確かな道を清田は歩んだのだと、ぼくは考える。

棺を蓋う赤旗は今ではなく、「同志は倒れぬ」の歌で送られたのでもなかつたが、清田祐一郎はまがうかたなく革命家として逝ったと、ぼくは思うのである。